

國學院大學學術情報リポジトリ

2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-14 キーワード (Ja): NDC8:121.52, 国学 コクガク キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001624

只野真葛（1763－1825）：近世の学者ネットワークとジェンダー

ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
上智大学 教授

1、はじめに

英語圏の研究において近世の人的ネットワークという概念は広く注目されてきた。池上英子が「徳川ネットワーク革命」と呼ぶこのようなネットワークが発達した背景には、交易路の改善、公的職務の規則化（参勤交代）、都市化、出版文化の隆盛といった要因があり、それらは相互に結びつきながら発展していった¹。しかし、人的ネットワークに関わる研究は男性のみが取り上げられるという傾向がある。男性は文化的な集まりや商業ネットワークを組織していく上で、しばしば指導的役割を果たしたからである。

先行研究の成果は、近世日本の男性たちが、身分によって彼らを区分する枠組みという前提の下で生を送りながらも、それらの境界線を、政治的・経済的・文化的・宗教的活動に結びついたネットワークを形成するなかでしばしば越境していたことを示している²。このようなネットワークの性質を探ることは、身分や地位のみで境界が定められた社会という静的なイメージの限界を際立たせる。しかしネットワークは、同じ社会階層、居住地、社会集団に属する人々をより強く結束し、新たな結合を生み出し、既存の社会構造や社会秩序を補完・強化する役割も果たしていた。これは、女性に関連したネットワークによく見られることであった。

女性たちのネットワークは主に結婚生活と生家を通じて形成された。だが多くのネットワークは親族関係の範囲を超えていった。旅行、商業、仕事、奉公、慈善行為、宗教といった機会を通じて、女性たちは結びつきを発展させていったのである。また、女性が筆と紙で地理的境界を超えてネットワークを拡張することも見られた³。しかし学者間で構成される親族関係ではないネットワークにおいては、性別は重要なものであったようだ。この小論文ではネットワークにおいて性別を無視した歴史研究への認識を高めることを目的とする。特に学者ネットワークにおける女性の関わり方について論じる。

そのために、ここでは只野真葛（1763－1825）をケーススタディに取り上げる。真葛のライフコースは、近世の同程度の身分の女性たちと比べて特殊だったわけではないが、

¹ 池上英子『美と礼節の絆：日本における交際文化の政治的起源』NTT出版、2005年。

² 以下の序文も参照。Bettina Gramlich-Oka and Gregory Smits, eds. *Economic Thought in Early Modern Japan* (Brill, 2010); Mark Teeuwen and Kate Wildman Nakai, eds. *Lust, Commerce, and Corruption: An Account of What I have Seen and Heard, by an Edo Samurai* (Columbia University Press, 2014).

³ 一つの例外として、Gramlich-Oka, Walthall, Miyazaki, Sugano, eds. *Women and Networks in Nineteenth Century Japan* (University of Michigan Press, 2020) も参照。

彼女は独特の思想の持ち主だったことが、その著作から分かる。特に、近世が男性中心で男性主導の社会であった理由を考えようとした、一人の女性の思想を見せてくれるのである⁴。だが、真葛は学者ネットワークに属しておらず一師事する相手もいなかったし、管見の限りでは同時代の学者とのつながりもなかった一、それゆえに、傍観者としてではなく政治的な論文の著者として、男性たちの知的ネットワークに参加することを目指した。しかし、ジェンダー・バイアスと障壁が力を発揮するのはここにおいてのことである。従って、あらゆる階級の男性が自由に交わるという、よく言及されるところの多様性一特に近世後期における一は、女性の参加を、とりわけ学問の領域で排除している、と論じたい。真葛は男性歌人とのつながりを持つことはできたし、男性歌人のネットワークに仲間入りした同時代の女性は他にも多いが、学者コミュニティに参加することは女性にとって問題外のように思われた。

以下本稿では、まず真葛のライフコースを手短に概観してから、近世の学問とジェンダーについて簡単に考察する。続いて、曲亭馬琴（1767–1848）が「独考」の出版準備において真葛に協力することとなった学者コミュニティの一員に、彼女がなろうと目指していたことを紹介する。馬琴への真葛の手紙と彼からの返事を、「独考」や馬琴の「独考論」（1819年）とともに読むと、女性にとってのハードルがどれほど高かったかということ、そして学問が、身分に関係なく本来的にジェンダー化されたものであったかということが明らかになる。

2、只野真葛の生涯

只野真葛は、今日においてはそれほど有名な人物ではない。真葛（工藤あや子）は、仙台藩伊達家の江戸屋敷に仕えた医師、工藤平助（1734–1800）の長女として生まれた。彼女の母も、仙台藩に仕えた医師桑原陸朝（1755 没）の娘であった。真葛は、幼いころからすぐれた教育を施された。最初の師は当時歌道の師として名高かった荷田蒼生子（1722–1786）である。『古今集』や『伊勢物語』を学びながら、和歌・和文の能力を培った。16 歳から 10 年間あまり、仙台藩主の娘のもとで仕え、ここで為政者に間近で接する機会を得た。35 歳で仙台藩士の只野伊賀（1812 没）の後妻となり、仙台に移り住み、63 歳のときに仙台で生涯を終えた。

本稿において、真葛が受けた教育は重要である。もちろん、近世に女性が教育を受けることがなかったというのではない。事実むしろその逆で、身分の高い家の女性や、裕福な家に生まれた女性は、基本的な読み書き能力以上の教養を身につけていた。真葛は和文を中心とした教育を受けた。真葛の詩への関心と、詩作の才能は、桑原家に由来する。真葛によれば、彼女の祖母、桑原やよ子（生没年不詳）が書いた『宇津保物語』の成立年代を論じた小論はよく知られている⁵。真葛の母は、三島景雄（別名自覚、1727–1812）の

⁴ 只野真葛の生涯と著作について詳細は、ベティーナ・グラムリヒ＝オカ、上田未央（訳）『只野真葛一男のように考える女』（岩田書院、2013 年）参照。真葛の著作からの引用は全て、『只野真葛集』（鈴木よね子編『叢書江戸文庫』第 30 巻、国書刊行会、1994 年）に拠る。

⁵ 「むかしばなし」『只野真葛集』、13 頁。賀茂真淵の弟子村田春海（1746–1811）は、やよ子の小論

弟子であり、彼はおそらく祖母やよ子の知り合いでもあった⁶。

真葛の政経知識は父工藤平助からの影響であった。平助は今日では専らロシア帝国を調査研究したことで知られる。平助の献策書「赤蝦夷風説考」(1781-1783年成立)は、老中田沼意次(1719-1788)に向けて書かれたものであると考えられる⁷。同時期に、「報国以言」という上書にも署名している⁸。この意見書では長崎のことを取り上げている。長崎の貿易状況は嘆かわしいもので、大幅な見直しを必要としていた。自身のネットワークのおかげで、松前藩から長崎までおよぶ幅広い人脈と情報提供者をもっていた平助は、蝦夷や長崎に行かずして理論的な構想を描くことができたのだ⁹。これらの著作は、一人の江戸者が「日本国」の経済的・政治的境界線をどう考えていたかを知る上で有益な史料となっている。

平助は幅広い交友関係を持ち、大名、医者、仏僧、料理人、学者、役者などが患者として、あるいは平助の医学以外の知識を求めて訪れた。真葛はその交遊の場を傍観することで、海内外の様々な出来事について見識を深めることができた。

真葛の知識や探究心は、真葛が残した著作で余すところなく発揮されている¹⁰。その内、今日最もよく知られているのは半自伝的な「むかしばなし」と経世論「独考」の二つである。「むかしばなし」(1812年前後成立)では主に真葛の少女時代が回想され、18世紀末の仙台藩や医者 の 家庭内 の 様子 が 描 かれて いる。「独考」(1818年前後成立)は、真葛が女性の立場から当世の社会・経済状況を分析し、解決策を提言した献策書である。賀茂真淵(祖母やよ子の知り合い)や本居宣長の著述に言及しながら、新井白石や熊沢蕃山の経世論を

に感銘を受け、それを書写している(田中康二『村田春海の研究』汲古書院、2000年、430頁)。1808年に、村田晴海の弟子であり後に真葛の師となる清水濱臣(1776-1824)もこの小論を書写している。丸山季夫「三島自覚晩年の逸事」、『近世の学芸』八木書店、1976年、20頁。

⁶ 「むかしばなし」『只野真葛集』、13頁。真葛は、工藤家のそばに住んでいた三島景雄と母の、長い間の交流を伝えている。

⁷ 工藤平助「赤蝦夷風説考」『新北海道史』第7巻(新北海道史印刷出版共同企業体、1969年)、288頁参照。ベティーナ・グラムリヒ＝オカ「仙台藩医工藤平助と幕府の政策」『日米欧からみた近世日本の経済思想』川口浩、ベティーナ・グラムリヒ＝オカ(共編者)、岩田書院、163-228頁。

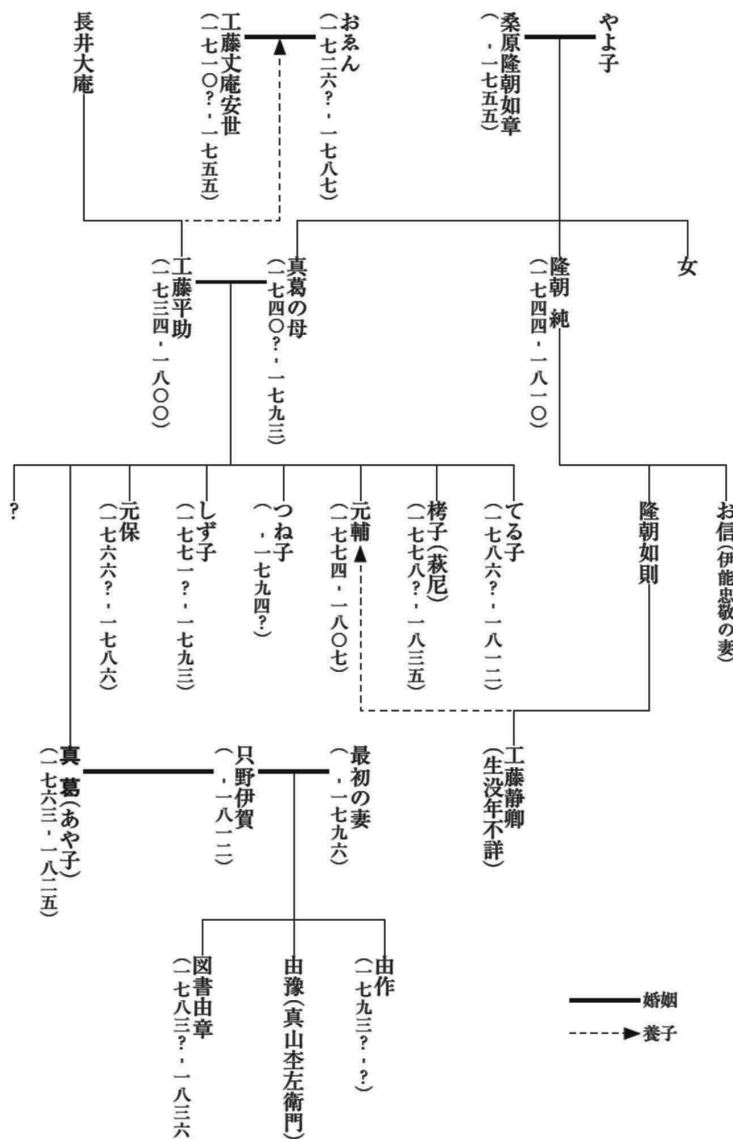
⁸ 工藤平助「報国以言」林復斎編『通航一覧』第8巻、国書刊行会、1913年、清文堂復刊、1968年、485-504頁(序は欠けている)。ベティーナ・グラムリヒ＝オカ「仙台藩医工藤平助と幕府の政策」。

⁹ 平助は蘭医学を学びに長崎へ遊学したとしばしば主張されるが、これは作り話である。こうした作り話が流布した原因は本田利明にあると思われる。平助が長崎に滞在している折に、オランダ商館長(カピタン)アレント・ウィレム・フェイト(1747-1781)と日常的に会話していた、と書いているからである。大友はこの逸話を紹介し、本田利明の『北辺禁秘録』から引用している(工藤平助「赤蝦夷風説考」大友喜作編『北門叢書』第1巻、北光書房、1943年、40頁)。しかし実際には、平助はどこにも行く必要がなかった。自宅にいながらにして、対外貿易窓口となっている地域から来た情報提供者に会うことができたからである。そうした人々のなかには、オランダ通詞の吉雄耕牛がおり、また長崎にいた門人の樋口司馬(生没年不詳)、やはり門人で松前藩に仕えた米田元丹などがいた。樋口と米田については、「むかしばなし」『只野真葛集』の46頁と51-52頁にそれぞれ記載がある。平助が唯一西に旅をした際にも、関西地域までしか行っていない。真葛によると、関西には土井利徳から妾の治療を依頼されて出向いたらしい。しかし、平助が到着する前にその女が亡くなってしまったので、全部で50日間ほど上方見物をしたようだ(「むかしばなし」『只野真葛集』、85頁)。

¹⁰ 『只野真葛集』参照。

論い、儒学や経書を批判する内容となっている。西洋解剖書への言及もあり、また真淵門人の村田春海（1746－1811）に称賛された歌学の才能が存分に発揮されている。当世の社会情勢と政治を取り上げた真葛の論考としては、「独考」に加え、「キリシタン考」がある¹¹。

真葛の「独考」は平助のさまざまな思想を映し出す史料となっているが、真葛は、学者の世界から離れていたために、ほかの人々とは異なる考え方をしていた。一番大きな差異は文体である。「独考」は独特な作風の和文で書いてある。



ベティーナ・グラムリヒ＝オカ、上田未央（訳）『只野真葛—男のように考える女』岩田書院、2013年、57頁より。

¹¹ 「キリシタン考」『只野真葛集』参照。ベティーナ・グラムリヒ＝オカ「只野真葛のキリシタン考」国際日本学研究所研究成果報告集『国際日本学』13号（2015）、法政大学、183-208頁。

只野真葛の年譜と主な著作（略）

宝暦 13 年（1763）	長女として生まれる（父・工藤平助、母・桑原隆朝娘）
安永 7 年（1778）	仙台藩邸で奉公を始める
天明 4 年（1784）	伊達詮子の縁組に従って井伊家へ移る
天明 6 年（1786）	弟元保没（1765 年生まれ）
天明 8 年（1788）	奉公を辞し、家に戻る
寛政元年（1789）	鶴岡藩士と縁談
寛政 5 年（1793）	母没（1740 年？生まれ）
寛政 9 年（1797）	仙台藩士只野伊賀と縁組し、仙台へ移る
寛政 9－11 年（1797－9）	「みちのく日記」
寛政 12 年（1800）	父没（1734 年生まれ）
文化 4 年（1807）	弟元輔没（1774 年生まれ）
文化 4－13 年（1807－14）	「七種のたとえ」
文化 8－9 年（1811－2）	「むかしばなし」
文化 9 年（1812）	夫没
文化 14 年（1817）	「奥州話」
文化 14－文政元年（1817－8）	「独考」
文政 2 年（1819）	馬琴と手紙交流
文政 3－7 年？（1820－4?）	「キリシタン考」
文政 8 年（1825）	真葛没

3、学者とジェンダー

同時代の中国や朝鮮と比べれば、近世日本の学者は低い身分に甘んじていた。武家を頂点とする身分階級制において、学者は、医者や仏僧などと同様、明確に定義された地位を持たなかった¹²。理念上は、家業と身分は対応するはずであったが、学業や医業には、身分に関係なく武士も平人も就くことができた。一般に、将軍や藩主に召し抱えられていた学者には武家の身分が与えられ、市井で治療を施した医者や私塾で教授した儒者の多くは平人の身分であった。また武家が失職した場合、平人の職に就けば武家の身分を失ったが、学者になれば武家のままでいられた。その一方で、平人が身分の固定されていない学者になれば、社会的上昇を望むことが可能であった。18 世紀後半には、私塾の経営が学者の活路として一般化したのは、経済的・文化的利益に加え、藩儒に召され、武家の身分を付与される機会を窺う学者が少なくなかったためと思われる¹³。近世には、学問を修めた男性が社会的上昇を望んだ場合（女性は初めから除外されていた）、医者や学者を目指すの

¹² 近世日本の儒者の地位については、Kate Wildman Nakai, “Chinese Ritual and native Japanese Identity in Tokugawa Confucianism,” in *Rethinking Confucianism: Past and Present in China, Japan, Korea, and Vietnam*, ed. Benjamin A. Elman, John B. Duncan, and Herman Ooms (UCLA Asian Pacific Monograph Series, 2002), p. 259 参照。学者と同じく曖昧な地位を保持していた僧侶・尼・神主などは、本来、個々の寺社に所属し、寺社奉行の統制下に入るべきであったが、当局の意向に反し、多くは無所属のまま平人として登録されていた。

¹³ 海原徹の概算に拠れば、近世日本にはおよそ 1500 の私塾が存在しており、その大多数が安永 9 年（1780）以降に開設された。海原徹『近世私塾の研究』（思文閣、1983 年）、18 頁。

が合理的な進路であった¹⁴。宇野田尚哉の定義によると、学者は「知識の所有者であることが社会的存在形態の基礎となっていたような人物」である¹⁵。しかし、この定義は男性にしか適用されないように思われる。言い換えれば、学問の道は、近世階級を乗り越え、社会の中での地位を上昇させる機会を提供したが、ジェンダーは、それを乗り越える機会を提供しなかった。結果的に通常女性と男性がともに学ぶことはなかった¹⁶。また、女性が中国の古典を習うことはめったになく、漢詩を学んだ女性は数人しか知られていない¹⁷。

真葛も例外ではない¹⁸。真葛も、自分の受けた教育が、平均的な藩士／藩医の息子として漢学の基礎を学んでいた兄弟のものとははっきりと異なっていたと書いている¹⁹。真葛は、自分はこのような「男性向け」の教育を受けなかったので、男性とは異なった見方で世間と社会を観察できると述べている²⁰。女性と男性との関係は、これまでの研究では看過されがちであった。しかし馬琴は、無意識のうちに、学問の世界に隠されたジェンダー言説を使っているのである。たとえば馬琴は次のように書いている。

みちのくなる真葛の刀自は、よろづのうへを考あきらめむとほりする癖あればにや、いとあたらしき説どもをまめやかに綴りつゝ独考となん名づけたる、老の寝ざめのすさみなるべし。いでやいにしへの御達のふみつゝる才ありけるも、さうし物がたりのみなるに、いかなればこの刀自は、国を治め家をとゝのへ、身をおさむべき事さへに、いとねもごろにろうじたり。そがかたちこそをうなゝれ、をのこだましひあればなるべし。（「独考論」310 頁、下線は引用者）

学者としての活動とジェンダーは、表面的には関わりのないことである。しかし、馬琴はしばしば、それらを重ね合わせている²¹。たとえば、「かゝるすぢは婦人のしるべき事にあらず。又あげつらふべき事にもあらずかし」（「独考論」340 頁）と馬琴は「独考論」で述べた。「独考」の中で真葛が何回も述べているように、彼女にとってはジェンダーと

¹⁴ 手習いと文芸の女師も文化的資本と収入を得られたが、身分の変化を得るには男性との続柄を必要とした。

¹⁵ 宇野田尚哉「儒者」『身分的周縁と近世社会 5—知識と学問をになう人びと』横田冬彦編、吉川弘文館、2007 年。

¹⁶ たとえば「農業図絵」に関する以下の論文を参照。長野ひろ子「日本近世農村におけるマスキュリニティの構築とジェンダー」桜井由幾他編『ジェンダーで読み解く江戸時代』（三省堂、2001 年）、173-212 頁。桑原恵「近世的教養文化と女性」女性史総合研究会編『日本女性生活史』第 3 巻（東京大学出版会、1990 年）。

¹⁷ 漢学（言語と文学）を学んだ女性もいた。荒木田麗女や江馬細香である。そのような女性たちが、どの程度中国の古典とその解釈について学んだのかを論じた研究は、ほとんど行われてきていない。

¹⁸ 真葛の夫が彼女に漢詩の作り方を教えただろうことが、彼女の遺した一首の漢詩によって示される。『只野真葛集』、548 頁参照。

¹⁹ 漢学については以下を参照。黒住真「漢学—書記・生成・権威」、ハルオ・シラネと鈴木富美編『創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、1999 年）。

²⁰ 「独考」、269 頁。

²¹ 「独考論」、340 頁。

学問は密接に関わっていた。女性であるということと、儒教のテキストを読み教育を受けた学者ではないということは結びついていたのである。どちらも、真葛が乗り越えようとした壁だった。そしてどちらの壁も、真葛の前に高く立ちはだかっていたのである。馬琴の「独考論」の中には、男性的な学問の世界のパラダイムが隠されていた。当時の学者たちは、共通のテキスト解釈と表現方法を取っていたのである²²。

著名な江戸の思想家たちは皆、このような伝統の中にいた。彼らは皆、同じ理論的枠組みを共有していた。それは黒住真によれば漢学である²³。江戸時代後期、知識、中でも医学の知識は、朱子学の解釈を通して習得された。国学者本居宣長も、漢学や医学、そして朱子学のイデオロギーを学んだ。「むかしよりただ学問とのみいへば、漢学のことなる²⁴」と言われていたのである。真葛が「伯父」と呼ぶ村田春海も『和学大概』（1792年）のなかで、学問の道といえば朱子学であると書いている²⁵。漢学を本格的に学んでいない人が、学問の世界で認められるのは二世代ほど先のことになるし、それ以降も主流にはなりえなかった²⁶。真葛は、漢学を主流としながらも国学や心学、蘭学が盛んになりはじめた、学界の転換期に「独考」を書いたのである。真葛は当時依然として主流であった漢学の知識を持っていなかったが、彼女が学問の世界に入れなかったのは、そのためというよりは、彼女のジェンダーのためであった。それにもかかわらず、次節で見るように、彼女のジェンダーに自覚的だった真葛は、女性の学者として知られることを望んでいた。

4、学者として認められるための真葛の決断

真葛の「独考」が、日本女性史におけるランドマーク的作品であることは疑いようがない。真葛は、この作品によって、男性の領域であった学問の世界へ踏み込んだのである。女性が書くことで自己表現をし、アイデンティティを形成するために、乗り越えねばならなかったジェンダーの壁は、フェミニストの女性史研究の中でさかんに研究されてきた²⁷。「独考」からは、男性中心の世界におけるジェンダーの違いを、真葛がどのように乗り越えたかということが明らかになる。また、真葛が、女性としての強いアイデンティティを

²² すこし古いのが、丸山真男は、国学者はその構造的アプローチという点で古学者、とりわけ荻生徂徠に近いと述べている。

²³ 黒住、1999年。

²⁴ 本居宣長「宇比山踏」『本居宣長全集』第1巻（筑摩書房、1968年）、7頁。関民子「学問と女性」総合女性史研究会編『日本女性の歴史・近世』（角川書店、1993年）、137頁。馬琴は、本居宣長が漢学の教育を受けていたことで、彼を尊敬している。『独考論』、360頁。

²⁵ 村田春海「和学大概」平重道・阿部秋生編『近世神道論』日本思想大系39巻（岩波書店、1972年）、448頁。

²⁶ たとえば、本居宣長の弟子を自認した平田篤胤（1776-1843）は学界での評価は高くなかった。馬琴も、平田篤胤は教育を十分に受けていないために本格的な学者としては認めていない。『独考論』、359、360頁。

²⁷ 詳細な議論は、グラムリヒ＝オカ、2013年、第3章、第4章を参照。先行研究は中山栄子『只野真葛』（自家版、丸善発売、1936年）、関民子『江戸後期の女性たち』（亜紀書房、1980年）、関、1993年、関民子『只野真葛』（吉川弘文館、2008年）、門玲子『わが真葛物語—江戸の女流思索者探訪』（藤原書店、2006年）である。

形成するに至った過程を見ることができる。真葛は「孝」を執筆の動機とした。彼女の作品の中には、平助の思想との関連性が見られる。しかし、真葛は自分自身の政治的、社会経済的考えをも表明している。当時の学界の主流に反発して議論を展開したのは、思想家、改革者としての真葛その人だったのである。

「独考」を書き下ろそうという真葛の決断は、自分の生家への絶望から来るものだと彼女は主張している。1812年以降、遠く離れた仙台で未亡人となっている間に、真葛の弟が早世してから工藤家を存続させるため養子となった桑原家の甥が、家の名声と資産を食いつぶしていたのだ。真葛の目からすれば、そうして父の知的遺産が終わろうとしていたのである（実際、甥の代で工藤家は終焉を迎えたようである）。父の遺志を継いでいくことは今や真葛の務めとなり、彼女は筆を執った²⁸。

1817年、彼女は「独考」を書き始めた。55歳の時のことであった。そのときまでに、彼女は束縛される状態からも脱していたのである。それから一年後、彼女は曲亭馬琴に、妹を通して原稿とお金を送った。原稿を校訂し、出版の手助けをしてほしいという書簡を添えてである。彼女が、馬琴に原稿を送ったのは、自分だけの力では「世に出る」ことも「あらはれる」こともできないと知っていたためである。「世に出る」「あらはれる」などの表現は、彼女の作品中で、社会で成功した、あるいは成功するはずだった男性たちについて述べる際に使われている²⁹。父から受け継いだ知識や、経済政策についての知識があると、自分では自信があっても、男たちの公共圏には、男と同じようには入っていけない。そのことに真葛は気付いていたのである。

なぜ真葛が、面識のなかった馬琴にテキストを届けようとするに至ったのかということとは分かっていない。真葛と馬琴との間に以前から面識があったという記録はない。真葛は、自らの著作を出版して、一般の人々の関心を引き起こしたかったのかもしれない。真葛から馬琴への書簡が数通、馬琴からの返信が一通、馬琴の書いた長文が二篇、現存する。真葛がなぜ馬琴に連絡を取ったのかは書かれていないが、これらの書簡から、どのように真葛と馬琴との交流が始まったのかということが分かる。真葛に関連して馬琴の書いた最初の文章は「独考」への返信というかたちで書かれた「独考論」であり³⁰、第二の文章は数年後の「真葛のおうな」（1825年）である。「真葛のおうな」は、毎月会合を開いていた文人のサークルで発表されたものである³¹。（私たちににとって）幸運なことに、私信の記録・書写において几帳面なことで知られる馬琴は、真葛からの書簡を、後のために保存しておいた³²。馬琴の残した記録のなかには、真葛宛ての馬琴自身の書簡も含まれる。

²⁸ 「七種のたとへ」、384-385頁。

²⁹ 書簡「昔ばなし」『只野真葛集』、373頁。「とはずがたり」『只野真葛集』、375頁。

³⁰ 「独考論」、310-370頁。

³¹ 1825年10月1日に発表された。このサークルに属した12人の中には、山崎美成（1796-1856）、屋代弘賢（1758-1841）、馬琴の息子である宗伯（1798-1835）らがいた。

³² 真葛の書簡は、以下に収められている。「独考餘論」『只野真葛集』、331-388頁。滝沢馬琴「独考論」『新燕石十種』、393-406頁、『馬琴書翰集成』第6巻、柴田光彦・神田正行編（八木書店、2003年）、233-251頁。本文に引用したものは、注記するもの以外は全て『只野真葛集』からの引用である。

また、「真葛がはら」の一部が真葛の書簡内で引用されていることから、真葛本人と馬琴が交流を持ったことは確実である³³。

馬琴は1819（文政2）年2月に、原稿の添削と出版への便宜を依頼する書簡とともに、原稿を受け取った。それどころか、真葛は宛名の書き方を間違え、きちんとした礼儀で自己紹介することもなかった。礼儀を欠いた真葛の態度により、馬琴はその夜のうちに、短い返答の書簡を書くことを決めたという。その返答では彼の怒りを伝え、彼女が二度と連絡を取ってこないようにすることが意図されていた。馬琴は、なぜ彼が選ばれたのかよく分からないということや、彼は儒者や国学者といった専門の学者ではなく、大衆小説の職業作家であることも付け加えた³⁴。

真葛から、再び書簡が届いたときは、どれほど驚いたことだろうか。その手紙の内容にふさわしく、「とはずがたり」と呼ばれるこの書簡は、1819年3月11日に書かれたものである。

扱おもへらく、何の為に生れ出つらん。女一人の心として、世界の人にくるしみを助たくおもふことは、なしがたきの一番たるべし。（「とはずがたり」375頁）

真葛は、馬琴の同情を得るために「女一人」であることの苦しみを語るのである。

書しるさばやとおもひ立て、いとおほけなきこと共を云ひ出せるにぞ候。（「とはずがたり」376頁）

馬琴は簡潔に「この長ふみを見る程に、おもはず涙ははふり落ちて、あはれむこゝろになりたり（「真葛のおうな」253頁）」と書いている。彼は真葛の苦しみに共感し、彼女の娘としての孝行心に感銘を受けた。彼女が「独考」を書いた理由に納得した馬琴は、一時的にせよ、男性の世界へ彼女が入ってくることを認めたのである。馬琴は長い答えを書き終えるのに二晩かかったという。

それから数週間後、「昔ばなし」（1819〈文政2〉年4月15日）という題の書簡（真葛は同じタイトルの随筆も書いているが、それは別の作品である）で、真葛は、自分は工藤家の跡継ぎになると述べている。

³³ 馬琴から只野真葛宛ての書簡（表題なし、1819年3月24日付）、中山栄子『只野真葛』（自家版、丸善発売、1936年）、102-108頁。中山は、この書簡を、1890（明治23）年発行の落合直文（1861-1903）の『国民之友』15号から引用した。この書簡は、『馬琴書翰集成』第1巻、118-123頁にも掲載されている。著者が引用するのは、注記するもの以外は全て中山（1936年）からの引用である。本稿では以降、「馬琴書簡」と略記。また、「七種のたとへ」という表題の付いた真葛の書簡は、「真葛がはら」の中にも収められている。『只野真葛集』、500-507頁。他にも、馬琴の書いたもののなかに、真葛に言及したものがある。たとえば、『滝沢家訪問往来人名簿』に真葛から最初の書簡を受け取ったことが書かれている。『滝沢家訪問往来人名簿』、256頁。

³⁴ 「真葛のおうな」、250頁。

名の響をも聞んとたのめりしを、いとかひなしと歎きつゝ、はた祖父以来はげみへしこゝろざしの、徒らにならんと思へばもだしがたく、かた端をもとりたてゝ見ばやと思ふは、真葛一人の身に成りにけりと、朝夕胸をこがし侍りて、やすき身すらも安からず。

扱こそ亡父がありし世におもひよりて、人に語りしことを思出るにも、かゝる筋のことは、男はらからにゆづりはてゝ、真葛があづからんことをおもはざりつれば、うるはしく心をもとめざりしを、かたほなることおほからめと朽をしけれど、誰にかとはん。又こゝらの年比考へつゝ、思ひ得しことをもくはへて、しどろにあやなせし独考の一書なれば（以下略）（書簡「昔ばなし」『只野真葛集』373-374頁）

真葛は、自分の目的のためにジェンダーを使うことに伴うリスクを以下のように述べている。

女の身にしては恥おもふべき事をもかへりみず、おほけなきこと共を申侍りしは、あながち人の心をかく取直さんとはあらず。（書簡「昔ばなし」374頁、と滝沢馬琴「独考論」『新燕石十種』396頁）

女性として学者の世界のしきたりから自由であったため、真葛は、物事を率直に述べることができた。あるいは、彼女自身の言葉でいえば「人の耳を驚かさん」（同上、374頁）とすることができた。その一方で、真葛は、世間のしきたりを無視する理由として、自分のジェンダーを利用する。前置きがなければ、読者が当惑するであろうことを承知していたためである³⁵。そのために、彼女は馬琴の助けが必要となったのである。真葛は次のように述べる。

誠に――外しらぬ女のことに候へば、行とゞかぬはづと、みづから思ひわたる事に侍り。さきに奉りし「独考」のくだり――も、打ちゝにくげにおもはるゝ所々は、何卒御そぎとり被_レ下候様頼上候。（中略）かやうに遠国に一人はなれて居候ては、頼ものは神仏ばかりにて、はかなく世をわたりし事、心ほそさも御察し可_レ被_レ下候。（「とはずがたり」378頁）

「独考」では、十分な教養があることを証明するために議論を展開してみせたにもかかわらず、ここで真葛は、男性であり著述家でもある馬琴の前で自らを卑下してみせる。真葛が女性の弱さを口実として使っていることが分かる。

「独考」は学者としての真葛の作品である。ただ、「独考論」の中で、馬琴は真葛の型にはまらない独特の議論を非難し、多くの点で「独考」の内容には賛成できないと書いた。真葛の思想については馬琴の批評は厳しいものであり、真葛の儒教に対する知識不足や、漢学の教育を受けていない故の無知を、何度も指摘している。「独考」と同じに「独考論」

³⁵ 書簡「昔ばなし」『只野真葛集』、374頁。

は漢文で書かれてはいないが、中国の古典からの引用が多いテキストである。文体もジェンダーと関係する。

ジェンダーは、動く構造であると同時に、決して動かない障害物でもあった。真葛は、ジェンダーのもつ曖昧さについて、数通の書簡のなかで触れている。このことについては、別の書簡で、次のように自分の主張を補強しようとした。

「独考」の書は、もとより得もしらぬ女の心から、遠つおやの名を唯一度世にあらはしたくおもふ余り、世人の耳なれぬ事をと、しどろにあやなしつれば、あながち世人を教て、かくざまに引直さんとは侍らず。いづくまでも人のもてあそびとして、笑草になり候はんこそ、ねがはしく侍れ。(1819〈文政元〉年はじめの「せうそこ」、『只野真葛集』386頁)

真葛が、女性であるということを隠れ蓑として使っていることが分かる。しかし同時に、真葛は、ジェンダーのために、自分の主張が真剣に受け入れられないのではないかと考えていた。真葛が折りあいをつけようとしたのは、まさに、ジェンダー・ヒエラルキーと読者の反応とが複雑に絡み合う状態—女性著述家によく見られる状態—であった。近世の男性である著述家にはみられないことである。

5、男性の方式

真葛は、ジェンダーに曖昧さのない定義を与えている。ジェンダーのあらゆる概念が示すのは、男性であるということが、いかなる点でも有利に働くということであり、真葛もそれと同意見であった。真葛は、ジェンダーを決定するのは身体的特徴であると考えた。そして、ジェンダーによる制限は、そこから来ているのだと考えた。「独考」のなかで、真葛は、本居宣長の『古事記伝』を引き、古代において、性差がどのように発見されたのかということを、自分はどのように理解するのか、次のように述べている³⁶。

此国に人の生出しはじめ、男女の名もなかりしに、身内を尋て成余りしとおもふかたを男とし、身をたづねて成たらぬと思ふを女とさだめられしとなん。(「独考」285頁)
(人々がこの国にはじめて生まれたとき、そこには男・女という名〈区別〉はなかった。それから、体を調べた結果、男は「成余り」〈余計な部分を持ち合わせている〉であり、女は「成たらぬ」〈欠陥のある〉ものである、ということになった。)

真葛がここで言及したのは『古事記伝』であるが、彼女は本居宣長の議論に与するのではない。宣長は『古事記』に詳細な注釈を付けたのだが、真葛は『古事記』の中の、上に引用した箇所注目した。女性ならではの目線であるといえるかもしれない。真葛は、この

³⁶ 本居宣長『古事記伝』『本居宣長全集』第9巻、大野晋・大久保正編（筑摩書房、1868年）165頁。

箇所こそ、男性と女性とを身体的特徴によって区別した最初の事例であるとした³⁷。

宣長の『古事記伝』を読んでジェンダーの関係性に思いを巡らせた女性は、真葛だけではなかった。しかし、真葛は自分の議論を、もっと急進的な方向へと進めた³⁸。真葛が『古事記伝』を読んで考えた、性器の違いによるジェンダーの定義は、西洋の科学の知識に影響を受けたものだったかもしれない。西洋医学について議論され、それらの本を読むこともできた家に育った真葛は、女性の解剖の様子が載った本を見たことがあった³⁹。その本はアダム・クルムスの『ターヘル・アナトミア』だったかもしれない⁴⁰。真葛は、その本の人体解剖図を見つめて、「男」と「女」の重大な違いは、まさに性器にあるのだと考えたのだ。そのように考えることは医師ではない一般人にはごく普通のことだっただろう⁴¹。ジェンダーを、目に見える、生理的な違いとして意識した真葛は、曖昧だったことを明確化することができるようになったのである。西洋医学の知識を持っていたことに加えて、宣長の『古事記伝』を読んだことで、真葛は社会を理解した。彼女は、当時一般的だったジェンダー言説を、生物学的な違いによるものとして理解した。

真葛がそれ以上議論を進めていなかったら、馬琴は彼女のジェンダー観に気がつかなかったかもしれない。真葛のジェンダー定義は、目に見えるものの下にまで広がっていた。男性と女性との決定的な違いは身体的なものだと論じることで、二つの性を明確に分離することが可能になり、「人の心」（感情）は「陰所の根」（「独考」267頁）に根ざしているという考えが導き出される。体を心（感情）と重ね合わせることで、真葛は人間の本質を、二つの異なる身体に分け、その異なる身体に応じた、それぞれの心があるのだとした。真葛の「男と女は、どうしてこれほど分かり合えないのだろうか」という長い間の疑問が、ここで解消された（「独考」、266頁）。外面的にも内面的にも男と女は同じではない。二つの性、あるいはジェンダーがあり、それらははっきりと異なっている。

真葛の考え方は、儒学の教えとは異なっている。馬琴はそれを認識していた。真葛が儒教の「心」の概念を軽視したのは、国学の影響を受けたためだという馬琴の指摘は、正しかったかもしれない。国学の思想を解釈して、真葛は、人は体を通して世界とつながっていて、人（human）であることと、人性（human nature）とは同じことだ、と考えるに

³⁷ 本居宣長『古事記伝』、169頁。

³⁸ 武家の女性、井関隆子は本居宣長を読んだあとで、つぎのように指摘している。男性と女性のはじめから、互いに必要な存在として結びついているとすれば、女性の役割が男性とは異なっていたとしても、男女の価値は、本質的には同じである、ということである。『井関隆子日記』深沢秋男編（勉誠社、1978-1981年）第1巻、130頁。第3巻、336頁。

³⁹ 「独考」、273頁。

⁴⁰ オランダ語版『ターヘル・アナトミア』の表紙には、女性がナイフを手に取り、女性の身体を解剖しようとしている絵が掲載された。このオランダ語版は、18世紀の江戸に少なくとも二冊存在したことが分かっているが、そのうち一冊は平助の友人でもあった前野良沢のもとにあった。『ターヘル・アナトミア』は『解体新書』として和訳された（1774年版）が、『解体新書』では表紙絵にはオランダ語版とは異なる洋画が用いられた。改訂版の『重訂解体新書』（1798年出版）は、オリジナルの表紙を用いていた。しかし真葛が西洋の本を読んだと書いているため、それは和訳された『解体新書』や『重訂解体新書』ではなく、オランダ語版であったと思われる。

⁴¹ 真葛が解剖についてある程度知っていたことは、「解体」「腑分」などという言葉を知っていたことからもうかがえる（「独考」292頁）。

至ったのだろう。馬琴にとって、身体的相違は、外面的なものだった。しかし、このような人性の理念は、実はジェンダー化されたものなのだ。人性という時、その「人」は男性であると想定されているのだ。

もし真葛の結論に従うのなら、彼女もまた周りの男性に対し劣っているということになる。しかしながら、彼女はジェンダーの制約を超えて、自身を高める方法を見つけた。「さとり」に達することである。社会に向かって自分の考えを発信することを正当化するために、真葛は「さとり」を開いたと主張した。彼女はジェンダーを超えるためにこの戦略を使った。彼女自身が「世俗」的に定義した、「さとり」という言葉を使うことで、真葛はジェンダーの壁を越え、声を発することができた。

男性中心の社会において、ジェンダー言説のイデオロギーは、女性蔑視という点では不変であるものの、フレキシブルで常に変化するものだった。真葛が否定したジェンダー言説もあるが、彼女が取り入れたものもあった。それによって、彼女の時代のイデオロギー的矛盾が明らかになった。結局のところ、日常生活においては、学者たちも異性を無視することはできなかった。馬琴も次のように語っている。「家に女人もなくてはならぬものなり。この故にこの嗟嘆あり」（「独考論」357頁）。

6、むすび

今日でも真葛は通常の研究枠にはまらない。彼女は有名な歌人でも随筆家でもない。少なくとも彼女の和歌や随筆は国文学者からあまり注目されてはいない。一方彼女は思想史の分野でも思想家としても認められていない。さらに真葛は国学者、蘭学者、儒者とも呼ばれず、女性史を研究する一女性としてのみ認識されていた。その上で真葛は、「最初の女の闘争宣言者」、「江戸の女流思索者」、「江戸時代でもまれな女性思想家」などというレッテルをはられていた⁴²。ここでは真葛の生涯を今日のカテゴリーや視点からではなく、真葛が生きていた当時の社会を彼女自身の視点で再考する。

「独考」の中で、儒教のテキストを学者たちにとってだけでなく、社会全体にとって有害なものだと論じたために、真葛は、国学の学派に属していると考えられることがある。真葛の経済観、特に武士が商人に学ぼうとしないことを非難する姿勢から、儒学者海保青陵ら重商主義論者たちとのかかわりが指摘されることもある。あるいは、彼女の議論へのアプローチが蘭学に影響を受けていると考えられることもある。このような、真葛の折衷主義は「独考」に最も顕著に現れている。だが、儒教、国学、蘭学といった、特定の学派の影響を強調しても、真葛やその父工藤平助のような、大胆な思想を展開した個人について説明することはできない。学派の分類によって生じる問題のひとつは、長く伝えられるような業績を残した学者や、思想的伝統の流れに沿う学者ばかりが研究対象となり、大きな業績を残さなかった人々は取り上げられることがないということである。また、このような分類法を用いると、多様な知的活動や議論が視野から抜け落ちてしまう。江戸時代後期には、多くの学者たちが、特定の学問分野や学派に限定されない議論に参加していた。

⁴² たとえば、門、2006年。

彼らは、私たちの目には対立関係にあるように見える、様々な学問サークルに参加していたのである。真葛は、どのようなカテゴリーにもぴったりとは当てはまらない。一つの理由は真葛のジェンダーである。

真葛の苦心の様子は、彼女が、自分が参加したいと考えていたネットワークからかけ離れた位置にいたことを私たちに伝えている。父親のネットワークは、成長期から嫁入り前に、家族の一員として裏方から眺めるだけのものであった。彼女の生涯を通じて、望んだネットワークに活発に加われない状況は続き、仙台に移住してから、状況はますます悪化した。真葛にとって江戸との繋がりは重要で（仙台での交遊関係については、ほとんど語られていない）、そのため自ら「むかしばなし」を著し、面識のない著名人にアプローチするほどであった。

真葛は、男性中心で排他的な学問の世界に入りこんだのである。女性でありながら思想家にもなった点で彼女はユニークな存在である。真葛の最初の読者となった馬琴は、彼女に感銘を受け、「男のように考える」女であるとした。この言葉がよく表しているように、ジェンダー言説と思想界の言説との間には相互関係があった。

はじめに指摘したように、旅行、商業、仕事、奉公、慈善行為、宗教といった機会を通じて、女性たちは結びつきを発展させていったのである。また、女性が筆と紙で地理的境界を超えてネットワークを拡張することもよく見られた。性別が女性のネットワークへの参画や貢献を妨げたようには見えない。しかし学者間で構成される親族関係ではないネットワークにおいては、性別は重要なものであったようだ。真葛はその一人の例である。真葛は和歌、俳句、宗教の集会に参加するつもりではなく、女性として男性社会の議論に参加するつもりだった。学術集会に参加する方法を知らず、馬琴にアピールした。どのグループと会のメンバーを見ても、女性の名前が出てこない。もちろん、俳諧、和歌、文人の集まりでは女性の名前もたまにでてくるだろうが、学問とはまた別である。タイミングは一つのネックかもしれない。たとえば、真葛の後輩、松尾多勢子、黒沢時子、野村望東尼の活躍は大分ちがっており、彼女たちは詩を通して政治運動（≠学術）に参加した。しかし、女性の学者は真葛以外おらず、「独考」のような文書は未だ見つからない。そのようなわけで、女性が学者になり、学術ネットワークに参加することはできなかった。

（編集協力 武田幸也・木村悠之介）